人間関係研究（南山大学人間関係研究センター紀要）, 23, 51

■ Article

ワークショップ形式によるプロテスタント教会の修養会に関する実践報告と検討

榊　原　康　成
（シティ リジョイス チャーチ）
楠　本　和　彦
（南山大学人文学部心理人間学科）
丹　羽　牧　代
（南山大学名誉教授）

要旨

本稿は、プロテスタント教会であるシティ リジョイス チャーチが2022年に実施したワークショップ形式の修養会について、実践を報告するとともに、それについて検討した。テーマを聖霊としたことの意味やそのテーマに関する学びを実現するために実施したワークショップ形式のプログラムについての分析を行い、その検討を通して、今回の修養会の成果や課題について明確にすることを目的とした。

目的を達成するために、修養会参加者のアンケートにおける自由記述をデータとしたKJ法の分析を行った。分析の結果、「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」と「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」の２つの大きな島が見出された。さらに、「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」内に、「聖霊の性質や働きについての気づき」、「聖霊についての実感」、「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」の３つの中程度の島が見出された。「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」の内に、「わかちあいの意義」の中程度の島が見出された。

キーワード

修養会、ワークショップ、聖霊、KJ法

Ⅰ．問題および目的

本稿は、プロテスタント教会であるシティ リジョイス チャーチ[1] (以後、CRCと略する)が、2022年に実施したワークショップ形式の修養会について考察する。CRCの修養会はワークショップ形式によって行われている。ワークショップ形式による修養会の特性や有効性について、丹羽・楠本（2021）で検討したため、ここでは簡潔に記す。また、キリスト教会におけるスモールグループに関するレビューは丹羽・楠本（2021）で行ったため、本稿では割愛する。

１．CRCでグループワークを始めた目的

（1）自分から学ぶ

牧師がメッセージ、講義を語る形ではなく、教会員、礼拝出席者が自発的、積極的に聖書から学び、聖書のことばに取り組む方法が望ましいと考えた。

背景：

牧師がこれまで実際に経験したり、牧師同士で情報交換をする中では、教会での学びの形が、講師（牧師）が語り、出席者が聞くという形が多かった。

しかし、この講義形式は出席者が自発的に考えたり、出席者の間で学んだことや感じたことを共有する点において足りないことがあると感じていた。そのため、グループワークで一緒に考えたり共有することで、より深く聖書を学ぶことができると考えた。その時、牧師が語るメッセージは補助的、補完的なものにして、出席者が自ら学ぶ方法を作っていきたいと考えた。

(2) イエス様の弟子となる

CRCでは、マタイによる福音書28章19節でイエス・キリストが命じた「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。」という箇所を受け止めた上で、礼拝、祈祷会、小グループで学ぶ時に「イエス様の弟子となる」ということを強調している。礼拝出席だけでは信仰者として足りないことがあるので、学ぶことで弟子となることを大切にしている。

しかし、弟子となることが強調されると礼拝することと、弟子となって成長することが別のことのように提示されているように感じていた。また、弟子となるということが、他の人に福音を語り教会に誘うことができる人となることだけが強調されていると感じてきた。

---

[1] 榊原康成牧師が、2004年に新しく教会を建て上げる開拓伝道の働きを始めて設立された教会である。2004年当時は、名古屋市の栄地域にはプロテスタント福音派に所属する教会がなかったことから、この地域での都市部伝道と次世代への伝道を目標にして始まった。

当初は、牧師の自宅であるマンションの１室を礼拝場所として始まった。その後、貸会議室を使用するなどして、現在は名古屋駅近くのCBI（キリスト聖書学園）のビルの１室を礼拝場所として使用している。自前の会堂を持たないため、CBIでの日曜日の礼拝の他に牧師自宅での金曜日の夜の礼拝や集会などをおこなっている。

弟子となるとはどういうことなのかをもう一度考えてみたい。本当の意味で礼拝を大切にし、毎週礼拝することを喜びながら一週間を生きる信仰者となっていくために、聖書をより深く学ぶことが大切だと感じてきた。それが弟子になることに繋がっていると考えた。そのために牧師が語るだけではなく、一人ひとりが自分から聖書のみことばに取り組んでいくことができるようにしたいと考えた。

何故、グループワーク、様々な方法を採るのか：
聞くだけではなく、視点、取り組み方を変えることで新しい経験をし、みことばを知る、自分の毎日に関係があることを知ることになると考えた。

2. CRCにおける修養会実施の概要

CRCは2004年より現在まで計20回のワークショップ形式の修養会を実施してきた。その企画・準備や実施は、榊原牧師が主となって行っており、時には、CRCの信徒が準備や実施に協力する場合もあった。その概要を資料１（丹羽・楠本、2021）に一覧表として記載した。資料1に、CRCの修養会の時期、長さ、テーマと主な内容、学び方や実習のタイプを記した。2018年春に半日の修養会を行って以降、新型コロナ感染症拡大の影響もあり、修養会を実施できなかった。そして、2022年春にCRCの修養会が再開した。

CRCの修養会の内容は、キリスト教の信仰に関する事柄から、榊原牧師がその時々に適したテーマを設定している。例えば、祈り（2006年秋、2007年春、2007年秋、2015年秋）、喜び(2009年春、2010年秋、2016年春)、赦し(2004年秋)、礼拝(2005年秋) 、賛美(2011年春)などがある。

これらCRCの修養会の中で、論文として報告されたプログラムは2007年秋実施の実習「閉ざされた村」(楠本・丹羽、2008)と2018年春実施の実習「決意の時」(丹羽・楠本、2021)の２プログラムである。実習「閉ざされた村」は人や社会との約束について考えることをテーマとしており、キリスト教の信仰や世界観を直接的に取り上げた実習ではない。実習「決意の時」は人生における重大な選択が必要な時における信仰のあり様について目を向けようとするものであるが、場面設定は現代であり、聖書を直接的に取り上げたプログラムではない。それに対して、本修養会のテーマは聖霊であり、聖句を直接的に取り上げたプログラムである点において、前述の２実習とは異なっており、本修養会の特徴となっている。

3. 本稿の目的

本稿では、2022年の修養会において、テーマを聖霊としたことの意味やそのテーマに関する学びを実現するために実施したワークショップ形式のプログラムについての分析を行い、その検討を通して、今回の修養会の成果や課題につ

いて明確にすることを目的とする。

Ⅱ．2022年春の修養会の実践報告

1．プログラムの準備・企画

（1）修養会のテーマとして聖霊を取り上げたことの意味

1）牧師の視点から

目的：

プロテスタント教会で、信仰告白の言葉として用いられている「使徒信条[2]」には「聖霊を信じ」と明確に教えられている。同時に教会生活を送る中では、助け主と呼ばれる聖霊の助けを祈り求める機会も多くある。

身近な存在であるはずの聖霊だが、実のところ、信仰者が聖霊をどのような存在として、また、働きをしている存在として受け止めているのかは、意外と知られていないと感じている。聖霊を自分は、どのような存在として具体的に考え受け止めているのかを改めて確認することと、同時に同じ教会に集う他の人がどのように受け止め、また、聖霊の存在、助けを経験しているのかを分かち合うことで、違いを知り、より深く聖霊について知る機会としたい。

キリスト教会で信じている「三位一体の神」は、父なる神、御子、聖霊であるが、三位格の助け主と呼ばれている聖霊を信仰者は、普段の生活、教会生活の中でどのように捉えているのか、聖霊とどのような関わりを経験をしているのかを分かち合うことで、より深く、正しく聖霊である神様について知ることができると考えた。

日曜日の礼拝で使徒信条を告白し、聖霊の導きと助けを求めている祈る機会も多いのが信仰者だが、聖霊の存在を具体的にかつ明確に理解しているのかを確認して学びを深めたい。同時に他の信仰者が聖霊をどのように理解し、どのような形で日々の生活の中で関わっているのを分かち合うことを通して、信仰の成長を望みたい。

2）信徒の視点から

ヨアキム主義に即すと、旧約聖書が「父なる神の時代」新約聖書のイエス・キリストによる歴史への介入の時代が「子なる神の時代」、そしてそれ以降現在に至るまでが「聖霊なる神の時代」と区分される。つまり現代社会に生きる信徒は聖霊の時代の中に在るとされている。ヨアキム主義自体は異端視されたものではあるが、この三つの時代説をそのまま取らないとしても、旧約聖書・新約聖書が描く時代と比べれば、イエス・キリストの顕現以降の時代がそれまでと異なっており、父なる神や子なる神が「直接的に」「物理的に」世界に介

---

[2] 使徒信条とは、キリスト教の信仰を告白する定式文の一つであり、信条の中では簡潔にまとめられていて「簡易信条」と分類される。プロテスタント教会とローマカトリック教会など西方教会で広く用いられている。

入してはいないように思われるのは事実である。ではどのような形で神が現代に働かれているのかは、多くの信徒にとっては、簡単には理解し難いものである。そのひとつの回答として登場するのが「現代においては聖霊が働いている」であるが、これを理解し実感するには更に困難が増す。

困難である理由はいくつか考えられるが、何より父なる神・子なる神と比較すると、聖霊なる神という存在は「人格」（正しくは人間の方が神の似姿として作られたとされるので、この表現は本来本末転倒ではある。）を汲み取ることが困難であることにある。ひとつには聖霊は人間の言葉で語らず「人間のような」姿形を取って行動をするわけではないからであろう。もうひとつはそもそも聖霊についての記述そのものが他の二格（父・子）と比べて多くないからでもあろう。

旧約聖書においても新約聖書においても、神は語る。旧約聖書においても少なくとも部分的に父なる神は「発言」したり、人間の理解できる形で契約を提示したりする。あるいは啓示を受けた預言者や詩人などが神の計画や有り様を人間の言葉にして表す。これによって往時も人間は不完全ながらも旧約聖書の神についてある程度は理解し、その存在を認知・意識することができたであろう。新約聖書の神は、まさしく語る神であり、イエス・キリストの言葉によって、そしてその言動を後の時代に理解・解釈した使徒や信徒の言葉によって、これまた不完全かもしれないが神の在りようを知る事ができる。同時に、旧約時代に示された父なる神の姿に新しい光をあてて、父なる神の姿・有り様により深い理解を得ることが可能である。信徒が礼拝説教などで耳にする神の姿も、大概は旧約聖書の神、もしくは新約聖書の子なる神としてのイエス・キリストが多くを占める。

それに対して、聖霊に関する記述は、まず量が旧約聖書・新約聖書ともに相対的に父・子に比べると少ない。なおかつ聖霊がどういう有り様で存在するのかというその性質に関しても手がかりが少ない。説教で語られるにしても、自ら聖書を読んで学ぶにしても、そういうわけで、聖霊は信徒がもっとも実感しにくい存在となっている。三位一体に照らし合わせれば、父と子と同じ「格」を持つであろうし、同じ「性質」を持っているはずなのだが、その存在が感じ辛いがゆえに、理解が及びにくい。

だが、新約聖書の中には聖霊の働きやその性質に関する箇所は散見される。旧約聖書にも「神の御霊」の記述が時に登場している。そのどちらの場合も、どんな状況でどのように神の霊が働いているかを考察していけば、直接的な性格や意図などが描写されていなくても、人間にとって聖霊とはどんな存在なのかを学んでいくことは可能である。またイエス・キリスト自身が、自分が昇天した後、信徒が取り残されてしまうわけではないとして、聖霊を紹介してもいる。「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。」「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊

が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」（ヨハネ14章16節、26節）。ここからは、キリスト以降を生きる現代信徒の生活に、聖霊が直結することが示されている。そうであるからには、現実の信仰生活の中で聖霊を理解し、認識することが重要でないはずはない。その重要性にもかかわらず認知しにくい聖霊を、概念ではなく、信徒としての心的・霊的成長のためにリアルにかかわりを持っていく相手としてとらえ直すために、「聖霊」が今回のワークショップのテーマとして選ばれたと言える。

（2）プログラムの検討の経緯

ここでは、本修養会のプログラムの最終案に至るまでの経緯を簡潔に記す。本修養会は2022年6月5日のペンテコステの日の午後、礼拝終了後に行うことが予定されていた。本稿で報告する修養会のプログラムの企画立案と実施は筆者ら３名で行われた。

2022年3月から筆者たちは本修養会のプログラムの企画立案を開始した。3月のミーティングでは、本修養会の内容の大まかなイメージや参加者等についてブレインストーミング的にアイディアを出し合った。

今までの修養会同様、本修養会もワークショップ形式、グループワーク形式で実施することが合意された。時間としては礼拝後の２時間程度が想定された。２時間程度であれば、取り上げるテーマについて、端的に、直接的に問いかけることがよいのではないかと話し合われた。グループワークのテーマ・内容の案として、使徒信条や聖霊やイエス・キリストなどが挙げられた。

取り上げるテーマについて、個人的な経験やイメージのわかちあいを行うとともに、それにとどまらず、聖書に示されていることの理解を深めることの両方が必要なのではないかと考えた。

第２回ミーティングは約１か月後の4月に実施された。1.アイスブレイク、2.グループワーク、3.聖書からの学びの三部構成で本修養会を行うこととした。テーマに関する議論の末、聖霊をテーマとすることにした（Ⅱ-1-(1)-1）と2）を参照）。

アイスブレイクとして、使徒信条中で気になる言葉や聖霊の色や形のイメージを問う案を考えた。グループワークとして、聖霊に関する設問に参加者が答える案を考えた。その質問には、聖霊とは、あなたにとってどのような存在か、聖霊は今、どこにおられると思うか、礼拝や日常の中で聖霊の存在や働きを感じたことがあるか、「助け主」である聖霊に助けられた経験があるか、新約聖書や旧約聖書のことばの中で、聖霊について教えてくれる箇所はどこだと思うか等の設問が想定された。最後に５分程度の短いメッセージを榊原牧師が行う案を考えた。

第３回ミーティングは5月初旬に行われ、第２回ミーティング案の再検討を行った。第２回ミーティング案について、設問に答えるだけではなく、グルー

プディスカッションや書くだけではなく貼るというような動きのあるワークにした方がよいのではないかとの提案があった。

その提案の基に、グループワークのパートについて、次のような２案が考案された。聖霊について、聖書箇所から探す、配置する。聖霊が人と関わっている箇所、働きの箇所を10～20箇所抜粋する。

その上で、第1案として、より具体的には①助け主であることが示されている箇所を取りあげ、②どうやって、どんな風に助けているか（例：禁止、とりなしている、導き、なぐさめ、平安）を考えるという案が考えられた。

第２案として、似た聖句（カード）を集めて、似たカードの集まりを配置する。そのカード群に名づけるという案が考えられた。

上記２案を筆者３名で簡潔にリハーサルしたところ、第２案の似たカードという基準を自分たちで設定し、その基準を基に集める活動は短時間で実施することが困難であると思われた。そこで第１案をさらに吟味・検討し、最終案の原案を決定した。

その後、電子メールを用いて、原案の修正を行い、最終案とした。

（3）プログラム最終案

ここでは、プログラム最終案の概要と、そのプログラムにおいて重視した点や留意した点などについて記す（図１、資料２参照）。

（3）-１．導入

導入について記す。導入は約15分で実施予定であった。

本修養会の「（１）学びの・ねらい」として、「「わたしは聖霊を信じます」の聖霊は実のところ？」が本修養会のテーマであることを提示することになった。キリスト教における三位一体の第三位格である「聖霊」を参加者が具体的に感じ、考えることができるよう、使徒信条の「わたしは聖霊を信じます」の一文を取り上げることを導入で提示することにした。

2022.6.5.

2022 年度 CRC 修養会日程表

今日のテーマ：「わたしは聖霊を信じます」の聖霊は実のところ？

14:15

導入
アイスブレイク
もし聖霊を描いてみるなら

14:30

聖霊の働きについての学びとわかちあい

1　**聖句の学び**

「父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。この方は真理の御霊です」
ヨハネの福音書 14 章 16－17 節

【聖書のことばに現われる「助け手としての聖霊」】

グループごとに、
1）みことばが書かれたカードを１枚ずつ表向けて、そのみことばが「みちびく」「とりなす（仲介する）」「みちる」「おしえる」のどの働きを示しているか、個人で考える。
2）カードと同色の付箋を、B 紙の４つの領域の自分が思う場所に貼る。

５枚のみことばについて、２）を行った後、
3）グループ内で配置が一致した場合もしなかった場合も、「なぜそこに置いたか」を聖句の言葉や状況からわかちあいつつ、最終的にはグループでどの領域にするかを決定して、みことばカードの両面テープをはがして B 紙に貼る。
全体で
4）みことばのカードをそこに置いた理由や経緯を全体でわかちあう。

2　**経験のわかちあい（証）**

【聖霊：私のガイドである助け主
―思い出したこと・もしくは今ここに思うこと】

1）３分～5 分程度で、「みちびかれたこと」あるいはその他の聖霊の助けを思い起こす。もしくは学びをして気づいたことや感想など話せることを思いめぐらす。

2）グループで経験や思いをわかちあう。

15:30

聖霊なる神についてのメッセージ
「今日一番心に留まったみことば」をカードに記す。
アンケート記入

15:45

図１　修養会日程表

続いて、「（２）アイスブレイク」を行うことにした。アイスブレイクは、【もし聖霊を描いてみるなら】という問いかけを以下の４つの点について行うことにした。それは、①色、②形、③質感、④静・動のイメージである。それぞれに１分間程度の時間をとり、イメージした。その後、どのようなことをイメージしたか、数名に発表してもらうことにした。

（3）-2. 聖霊の働きについての学びとわかちあい

続いて、本修養会の中心的なプログラムとなる「聖霊の働きについての学びとわかちあい」を行うことにした。その概要について記す。

事前に、榊原牧師が参加者を５～６名の小グループにグループ分けをして、それを参加者に伝え、小グループにわかれることにした。

「聖霊の働きについての学びとわかちあい」では、まず、「１　聖句の学び」のパートを30分程度行うことにした。ヨハネの福音書14章16節－17節イエスの言葉「父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。この方は真理の御霊です」をファシリテーターが紹介することにした。この聖句を紹介することを通して、本パートのテーマである【聖書のことばに現われる「助け手としての聖霊」】に焦点が当たることが期待された。

グループワークは以下の手順で進行することにした。

1)「みちびく」「とりなす（仲介する）」「みちる」「おしえる」の４つの領域に分けた模造紙をグループに一枚ずつ配布する。

2) ５つの聖句を選択して5色カードにプリントしておき、グループにワンセット裏向きに配布する（写真１～３参照）。それとは別に同じ5色の付箋を準備し、5色ワンセットの付箋を各自に配布する。

選択した５つの聖句は以下の通りである。

No.1(青)　“「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」”　ルカの福音書12章12節

No.2(ピンク)　“それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。”　使徒の働き16章6節

No.3(黄色)　“しかし、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。”　ユダの手紙1章20節

No.4(緑)　“同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。”　ローマ８章26節

No.5(茶色)　“あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや

自分自身のものではありません。”　コリント人への手紙 第一6章19節

＋αとして、６つ目の聖句を準備した。この6枚目のカードを出すかはファシリテーターが各グループの進行具合に応じて判断することにした。それは以下の聖句である。

No.6(紫)　“聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。”コリント人12章３節

3）一枚ずつカードを裏返していき、それが４つのどの働きに（どの領域に）あてはまりそうかを個人で考えて、まず模造紙上に付箋を配置する。実習の最後に全体でわかちあうことを予告することにした。

4）グループ内で配置場所が一致した場合もしなかった場合も「なぜそこに置いたか」を聖句の言葉や状況をわかちあいつつ、最終的にはグループ内でどこに配置するか決定して、両面テープをはがしてカードを配置する。

5）なぜそこに配置したかという結果と経緯を全体にわかちあう。

6）カードが配置された模造紙の写真を撮る

それぞれの聖句が「みちびく」「とりなす（仲介する）」「みちる」「おしえる」のどの働きにあてはまるのか、どの領域におかれるべきかという正解を筆者たちは想定しなかった。しかし、それぞれの聖句がある働きだけに偏らず、一定の多様さをもって配置されるかを確認する必要があると考えた。そこで、筆者たちが事前にこのプログラムをリハーサルした結果、以下のような領域に配置される可能性があるのではないかと考えた。

No.1：おしえる。

No.2：みちびく、おしえる。

No.3：とりなす、みちびく、（おしえるも？）。

No.4：とりなす。

No.5：みちる。

No.6：おしえる、みちびく、とりなす、みちる、（すべて？）

このように筆者たちの予想では、５つまたは６つの聖句は「みちびく」「とりなす（仲介する）」「みちる」「おしえる」のどこかの領域に偏ることなく、多様な領域に配置されるのではないかと考えられた。多様な領域に配置されることが予想されたため、これらの聖句を選択することに決定した。

「聖霊の働きについての学びとわかちあい」の次のパートとして、「２　経験のわかちあい（証）」を実施することとした。このパートのテーマは、【聖霊：私のガイドである助け主　―思い出したこと・もしくは今ここに思うこと】であり、聖霊をめぐる自分の経験や思いを語る場を設定した。以下のような手順

で進行していくことにした。

1）3分～5分程度で、

各自が「みちびかれたこと」あるいはその他の聖霊の助けを思い起こす。もしくは学びをして気づいたことや感想など話せることを思いめぐらす。

2）グループで経験や思いをわかちあう。

このパートはお互いが聖霊に関する証を行うことになるため、この場で語ることができること、語りたいと思うことを各自が自分で選び、無理なく語ることができることが重要であり、それが十分に配慮されることが必要だと筆者らは考えた。

「聖霊の働きについての学びとわかちあい」の最後のパートとして、「III 聖霊なる神についてのメッセージ」を実施することとした。本プログラムの最後に、今生きて働かれる神としての聖霊を意識できるような７分程度のミニメッセージを榊原牧師が行うこととした。

（3）-3.　聖句のカード記入とアンケート記入

自分が持ち帰りたい聖句をNo.1～６の聖句から選び、カードに記入することにした。また､無記名アンケート記入を参加者に依頼することにした。アンケート項目は自分が持ち帰ろうと選んだみことばに関すること、本修養会の意味、聖霊や自分について修養会で考えたこと、気づいたこと、学んだこと、であった（資料３参照)。

アンケートは無記名であったが､「本アンケートの記載内容について匿名性に配慮して論文に使用すること」の了解を得た。執筆予定している論文がどのような論文かを示すために、丹羽牧代・楠本和彦（2021）を例示した（資料３参照)。

アンケートに記入することを通して、本修養会の各自の学びや気づきのまとめを行うことができると考えた。また、アンケートによって、本修養会の各自にとっての意味やファシリテーターとして留意するべきことなどについて、筆者たちの理解が促されると考えた。

２．プログラムの実施

本項では、修養会当日(2022年6月5日)の実施について簡潔に記す。修養会は本稿で検討している成人対象プログラムと並行して、子ども対象のプログラムが実施された。子ども対象のプログラムは榊原牧師が実施を担当した。成人対象プログラムの参加者は13名、子ども対象のプログラムの参加者は3名であった。

（1）実習の実施

本稿で検討している成人対象プログラムにおいて、進行を担当するファシリ

テーターは丹羽が担当した。配布物準備など進行の補助を担当するコ・ファシリテーターは楠本が担当した。「III 聖霊なる神についてのメッセージ」は榊原牧師が担当した。

ファシリテーターは予定された実施内容を踏まえつつ、実際の参加者の活動内容や進行状況を確認してグループワークを進行していった。本プログラムは、グループ状況に合わせた実施時間の小さな変更があったが、それ以外はほぼ予定通りに進行された。

「Ⅱ. 2022年春の修養会の実践報告」の「１．プログラムの準備・企画」「(2) プログラムの検討の経緯」「(3) -2. 聖霊の働きについての学びとわかちあい」内の以下の手順「4) グループ内で配置場所が一致した場合もしなかった場合も「なぜそこに置いたか」を聖句の言葉や状況をわかちあいつつ、最終的にはグループ内でどこに配置するか決定して、両面テープをはがしてカードを配置する」において、各グループが作成した模造紙上のカードや付箋の配置結果の写真を以下に掲載する。

ファシリテーターが大きな危惧をもつような参加者の様子、グループの状況はなかった。それぞれの参加者が主体的に参加し、お互いが率直に語り合っているようなグループ状況だとファシリテーターとコ・ファシリテーターには感じられた。

プログラム内容に関して、進行が速いグループへ、ファシリテーターの判断で６つ目の聖句カードを追加してグループ活動することとした。結果的にすべてのグループにNo.6のカードを配布した。

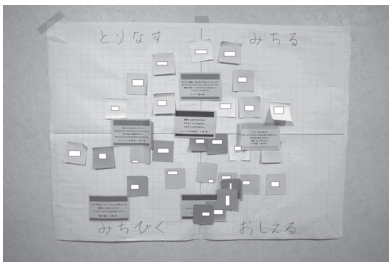

写真１　グループ１

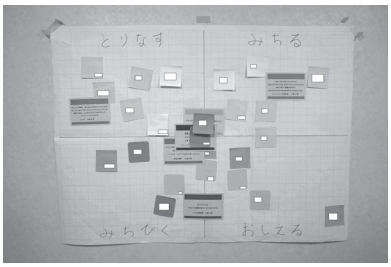

写真２　グループ２

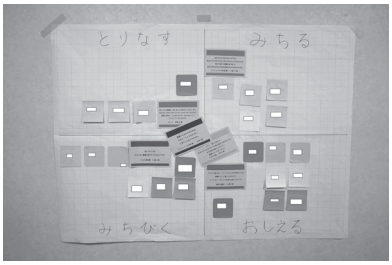

写真３　グループ３

各自の付箋とグループで合意して配置されたカードの成果物を示す（写真１～写真３）。グループ１では、No.5(茶色)が「とりなす」（左上の領域）と「みちびく」（左下の領域）との線上に配置された。No.4(緑)が「とりなす」と「みちる」（右上の領域）との線上に配置された。No.6(紫)が中央に、No.3(黄色)が「みちる」と「おしえる」（右下の領域）の線上に配置された。No.2(ピンク)が「みちびく」に、No.1(青)が「みちびく」と「おしえる」の線上に配置された。

グループ２では、No.4(緑)が「とりなす」に配置された。No.3(黄色)、No.6(紫)、No.6(紫)が中央付近に配置された。No.5(茶色)が「みちる」に、No.1(青)が「みちびく」と「おしえる」の線上に配置された。

グループ３では、No.4(緑)が「とりなす」の中央付近に、No.1(青)が「みちびく」の中央付近に、No.2(ピンク)が「おしえる」の中央付近に配置された。No.6(紫)とNo.3(黄色)が中央に配置された。No.5(茶色)が「みちる」に配置された。

このように結果は各グループで多様であるが、共通点も存在した。No.6(紫)はすべてのグループで中央に配置された。No.4(緑)はグループ２とグループ３が「とりなす」に、グループ１は「とりなす」と「みちる」との線上に配置した。No.1(青)は、グループ１とグループ２が「みちびく」と「おしえる」の線上に、グループ３は「みちびく」に配置した。

No.3(黄色)はグループ２とグループ３が中央付近に配置した。No.5(茶色)はグループ２とグループ３が「みちる」に配置した。No.2(ピンク)の配置はグループ１とグループ２が「みちびく」に配置した。

（2）榊原牧師によるメッセージ

「聖霊の働きについての学びとわかちあい」の最後のパートとして、「III 聖霊なる神についてのメッセージ」を行った。榊原牧師が以下のメッセージを行った。

メッセージ：

メッセージの中心となる聖書のことば：

「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。」 コリント人への手紙 第二　１３章１３節。

この１文は、コリント人への手紙 第二の最後の１節です。

また、ヨハネの手紙 第三、１５節にはこうあります。「平安があなたにありますように、友人たちが、あなたによろしくと言っています。そちらの友人たち一人ひとりによろしく伝えてください。」

こちらも手紙の最後の１文です。「愛するガイオへ、私はあなたを愛しています」と書き始められた手紙は、ガイオが居る教

会の愛する友人たち、一人ひとりの平安を祈ってその安否を尋ねながら手紙を閉じるのです。

ヨハネの手紙の箇所を翻訳した古い聖書には「なんじ　名をさして　友たちに　安否を問へ」とあります。

真の愛を持って一人ひとりの名前を上げて祈りヨハネが書き記し、また、パウロが手紙の最後に書き記したのはたんなる結びの言葉やお別れの言葉ではありません。一人ひとり、だれ一人漏れることなく、パウロやヨハネは名を上げて祈りながら手紙を書いています。

そして、冒頭に挙げたこのコリントの手紙の最後の１文は、礼拝の最後に牧師が祈る祝祷の言葉としてずっと用いられて来ました。御子イエスと父なる神、そして聖霊から私たち一人ひとりへと注がれる祝福を祈りながら、礼拝から日々の生活へと送り出す礼拝の最後のことばです。

ここに「聖霊の交わり」とあります。これは聖霊が私と交わりを持ってくださることを表しています。私とあなたとが交わりを持ち、そして、聖霊はあなたと交わりを持ってくださる。それは、イエス様からの恵であり、イエス様を私たちに与えてくださった父なる神様の愛です。聖霊との交わりを持てることは、この恵と愛と同じ価値がある大切なものなのです。

聖霊なる神様は目には見えません。触れることもできません。しかし、聖霊様は単なる力などではありません。私たちが自由に用いる道具のようなものとはまったく違います。私と交流を持つことができる。いや、持ってくださる方であり、存在なのです。そして、聖霊は私たち一人ひとりの内側に住んでくださる方です。同時に、私とあなたとの間に存在してくださる方です。この限られた存在である私と言う器の中に住んでくださり、私の内側に充ち満ちてくださるのと同時に、私たちの間に満ちあふれてくださる存在です。

この祝祷にも用いられるコリントの手紙の１文は、聖霊との交わりを私が持つことができることを示すと同時に私たちが単に教会の家族、教会で一緒に礼拝を献げる友人と言うことでの交わりでは終わらないで、聖霊である神様を通しての交わりを私たちの間に持つことができることを教えてくれる文です。聖霊なる神様は目には見えませんが、祈りと礼拝の中で聖霊様が満ちてくださっていることを経験できます。また、教会の兄弟姉妹との交わりの中ではそこに聖霊なる神様が互いの中に働き、私たちの間に働いてくださっていることを経験できます。

どうぞ、今日からこれまで以上に聖霊なる神様との交わりを強くはっきりと経験してください。あなたが経験する時、こうしてともに礼拝を献げている私たちもまた、共有して経験することができるでしょう。

（終）

予定よりやや延長して、本プログラムを終了した。

Ⅲ．2022年春の修養会に関する考察　―アンケート結果の分析―

1．持ち帰ろうと選んだみことばに関して

本節では、アンケートの項目「1．あなたが持ち帰ろうと選んだみことばは、どのみことばでしたか？そのみことばを選んだ理由や気持ちを記してください」について、結果を示すとともに、その分析を行う[3]。このみことばは、「今日一番心に留まったみことば」として、各自がプログラムの最後にカードに記したみことばである。

それぞれのみことばを選んだ人数とそのみことばを選んだ「理由や気持ち」を表1に記す。アンケートを提出した参加者数は13名であった。

以下にそれぞれのみことばに関して、選んだ人数と理由や気持ちの概要を記す。No.1“「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」”ルカの福音書12章12節を選んだのは2名であった。理由や気持ちとして、人生の分岐点における決断について伝えるときに聖霊が働いてくれた経験や、自分が語る時に、いつも祈ってゆだねることが大切だと感じたことが挙げられていた。

No.2 “それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。”使徒の働き16章6節を選んだ人はいなかった。

No.3“しかし、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。”ユダの手紙1章20節を選んだのは2名であった。理由や気持ちとして、「聖霊によって祈りなさい」部分が印象的だった。聖霊が主体、根本であること、自分自身にはもともとなかった「聖さ」が土台であると受けとめたことが記されていた。また、信仰へと導かれたのは「聖霊の助け、導き」なしでは無理であり、自分自身の人生、人格、人間関係など、自分を建て上げるあらゆるものの土台に、聖霊による祈りが最も大切だと思い返すことができて感謝だったことが挙げられていた。

No.4“同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何

[3] 個人の特定を避けるために、意図を損ねない範囲で一次データの一部を変更した。

をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。”ローマ８章26節を選んだのは3名だった。理由や気持ちとして、祈りや問題点をうまく言葉にできないことがあるが、聖霊がいてくれるから大丈夫ということを忘れないようにしたいという思いが挙げられていた。また、人間は弱い部分がたくさんあるけれど、御霊が助けてくださることを胸に生活してみたいと思うことが挙げられていた。どう祈ったらわからないときでも、御霊がとりなし、祈りの土台になってくださっていることへの感謝が記されていた。

表１　今日一番心に留まった、持ち帰ろうと選んだみことば

番号	みことば	人数	理由や気持ち
No.1	“「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」” ルカの福音書　12 章 12 節	2	・人生の分岐点において、決断とそれを言葉で伝える時があったが、自分ではどう伝えて良いか分からない時に聖霊が働いてくださったことがあったから。 ・自分が語る言葉が相手に与える影響を考えた時に、いつも祈ってゆだねることが大切だと感じた。
No.2	“それから彼らは、アジアでみことばを語ることを聖霊によって禁じられたので、フリュギア・ガラテヤの地方を通って行った。” 使徒の働き　16 章 6 節	0	
No.3	“しかし、愛する者たち。あなたがたは自分たちの最も聖なる信仰の上に、自分自身を築き上げなさい。聖霊によって祈りなさい。” ユダの手紙　1 章 20 節	2	・特に「聖霊によって祈りなさい」部分が印象的でした。「聖霊に助けられ」「聖霊に導かれ」というよりも、主体が、根本が、聖霊なのか、と受け止めました。最も聖なる信仰ということばも合せられ「聖さ」そして私自身にはもともとなかった「聖さ」が今は、土台であるというふうに受け止めました。 ・「自分自身を築き上げる」ということばに心が留まったから。聖なる信仰は決して自分で得られるものでもなければ、その上に自身を築くことなど、自分の力では無理で、それでもこうして生かされ信仰へと導かれたのは「聖霊の助け、導き」なしでは無理だと改めて思わされたので、自分自身の人生、人格、人間関係など、私を建て上げるあらゆるものの土台に、聖霊による祈りが最も大切だと、思い返すことができて感謝だった。
No.4	“同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。” ローマ　8 章 26 節	3	・祈りをコトバに上手くできない問題点をズバッと言い当てられないことがあるから、それでも聖霊がいてくれるから大丈夫というのを忘れないようにしたいと思って。 ・人間は弱い部分がたくさんあると思うけれど、御霊が助けてくださることを胸に生活してみたいと思うから。 ・どう祈ったらわからないときでも、御霊ご自身がとりなしてくださることを覚えたい。むしろ、どう祈るかも分からない弱い私に祈りを与えてくださっている土台になってくださっていることに感謝。
N0.5	“あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。” コリント人への手紙 第一 6 章 19 節	3	・信仰者として忘れてはならない信仰の土台や、霊的成長へと向かう視点を表しているみことばだから。 ・あなたがたは知らないのですか～という衝撃的な言葉で始まるところが心に刺さる気がした。 ・家族に救われて欲しいと願っているため。これは私の力ではどうにかできることではなく、聖霊の力によるのだということを自分の中に刻みたいという思いです。
No.6	“聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。” コリント人 12 章 3 節	3	・イエスさまを父なる神が約束された「すくいぬし」だと信じることができるのは、聖霊の働きあってこそのものだから。 ・何でも自分で決めているようで、導きがなければ、何一つ決められないのではないかと思います。いつも見守られて感謝です。 ・自分の信仰に（弱さに）嫌気がさすときに、それでも自分は聖霊によって「イエスは主です」ということができるのだと、安心するから。

N0.5“あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。”コリント人への手紙 第一6章19節を選んだのは3名だった。理由や気持ちとして、信仰者として忘れてはならない信仰の土台や霊的成長へと向かう視点を表していることが記されていた。あなたがたは知らないのですか～という言葉が衝撃的で心に刺さることが挙げられていた。家族に救われて欲しいと願っているが、これは自分の力でできることではなく、聖霊の力によることを自分の中に刻みたいという思いが記されていた。

No.6“聖霊によるのでなければ、だれも「イエスは主です」と言うことはできません。” コリント人12章３節 を選んだのは3名だった。理由や気持ちとして、聖霊の働きがあってこそ、イエスさまを父なる神が約束された「すくいぬし」だと信じることができることや、自分の信仰の弱さに嫌気がさすときでも「イエスは主です」ということができることが挙げられていた。また、何でも自分で決めているようで、いつも導きがあり、見守られていることへの感謝が挙げられていた。

上に記したように、持ち帰ろうと選んだみことばに関して、No.2のみことば以外の５つのみことばがほぼ均等に選ばれている。今日一番心に留まったみことばであり、持ち帰ろうしたみことばとして、多様なみことばが選ばれていることは、本プログラムにおいて提示された６つのみことばの選択が適切であり、参加者それぞれのさまざまな思いに応えることができたことを示していると考えることができる。

「理由や気持ち」の記述には、共通性と個別性が見られる。まずは、共通性について考える。「土台」という言葉がNo.３、４、５において記されている。「私自身にはもともとなかった「聖さ」が今は、土台である」（No.３）、「私を建て上げるあらゆるものの土台に、聖霊による祈りが最も大切だ」（No.３）、「どう祈るかも分からない弱い私に祈りを与えてくださっている土台」（No.４）、「信仰の土台」（No.５） という記述がみられる。６つのみことばの中に、「最も聖なる信仰の上に」（No.３） という言葉はあるが、「土台」という言葉はない。「土台」という言葉が複数の異なるみことばに関して記されていることについて、No.３のみことばにインスパイアされたためと考えることもできるが、三位一体の神である聖霊が自分の信仰の「土台」という考え・感覚が参加者の信仰の中に息づき、深く根づいているために複数個所で複数の参加者によって記されたと考えることが自然で、適切であろう。

自分ではできないことを聖霊が働き、助けてくれるという意の言葉も複数のカードに現れる共通性である。「自分ではどう伝えて良いか分からない時に聖霊が働いてくださった」（No.１）、「自分の力では無理で、それでもこうして生かされ信仰へと導かれたのは「聖霊の助け、導き」なしでは無理だと改めて思わされた」（No.３）、「祈りをコトバに上手くできない問題点をズバッと言い当

てられないことがあるから、それでも聖霊がいてくれるから大丈夫」（No.４）、「人間は弱い部分がたくさんあると思うけれど、御霊が助けてくださる」（No.４）、「どう祈ったらわからないときでも、御霊ご自身がとりなしてくださる」（No.４）、「私の力ではどうにかできることではなく、聖霊の力による」（No.５）、「導きがなければ、何一つ決められない」（No.６）、「自分の信仰に（弱さに）嫌気がさすときに、それでも自分は聖霊によって」（No.６）が、この共通性が示された記述である。これは、弱く、小さい人間である自分が、神である聖霊の働きによって、救い、導かれるという各参加者の信仰告白であると考えられる。

上記のような信仰に基づいた共通性を基盤として、それぞれのみことばに対応した個別性をもつ理由や気持ちの言葉も見出される。No.1では、言葉で伝える時のことに焦点が合わされている。「決断とそれを言葉で伝える時」や「自分が語る言葉が相手に与える影響」に関して、「聖霊が働いて」くれることや「祈ってゆだねることが大切」であるという神の働きや神への自分の態度が記されている。これは「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです」にインスパイアされた思いであり、このみことばに関する個別性であると考えることができる。

No.３では、「「聖霊によって祈りなさい」部分が印象的でした。「聖霊に助けられ」「聖霊に導かれ」というよりも、主体が、根本が、聖霊なのか、と受け止めました」という記述があった。これは「聖霊によって」というみことばから「主体が、根本が、聖霊」である、聖霊が三位一体の一つの位格であることを改めて強く意識したことに関する記載であると考えられる。

No.5では、「あなたがたは知らないのですか～という衝撃的な言葉で始まるところが心に刺さる気がした」との記述があった。これはNo.５のみことばからのとても強い影響がこの参加者になったことが示されている。また、No.６では、「イエスさまを父なる神が約束された「すくいぬし」だと信じることができるのは、聖霊の働きあってこそのものだから」という記述がある。これはNo.６のみことばがこの参加者にとって、「今日一番心に留まった」聖霊の働きであることが示されている。

２．修養会の意味度

アンケートの項目「２この修養会は、あなたにとって、どれくらい意味がありましたか？」に関する回答を記す。本節では、回答の数値のみを記す。回答は７件法で行われた。１は全くなかった。７は大変あった、である（資料３参照）。

「どのような点で」に記された記述については、次節の分析のデータの一部として用いる。

５は１名だった。その参加者は７に点線で○を併記していた。そして、「時間にゆとりがあれば、もう少し深く分かち合ったりしたかった」を記入されて

いた。この参加者にとっては、本修養会の時間が短く、もっと長い時間をかけて、より深くわかちあいたい思いがあったことがわかる。６は４名だった。７は８名だった。すべての参加者が５以上にマークしており、本修養会に意味を感じていたことがわかる。

３．本修養会の学びや気づきや思いに関するKJ法による分析

（1）KJ法による分析の概要

本修養会における参加者の学びや気づきや思いの全体像を明らかにするために、アンケートの自由記述をKJ法によって分析する。アンケート項目１～４の自由記述には78個の記述があった。この分析のデータとして、本章「１．持ち帰ろうと選んだみことばに関して」で分析した「理由や気持ち」の記述も含めた。それらの意味することをKJ法(川喜田、1967; 川喜田、1970)によって、分析した(図２)。

分析の結果、「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」と「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」の２つの大きな島が見出された。さらに、「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」内に、「聖霊の性質や働きについての気づき」、「聖霊についての実感」、「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」の３つの中程度の島が見出された。「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」の内に、「わかちあいの意義」の中程度の島が見出された。

「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」と「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」とはお互いに関係していると考えることがで

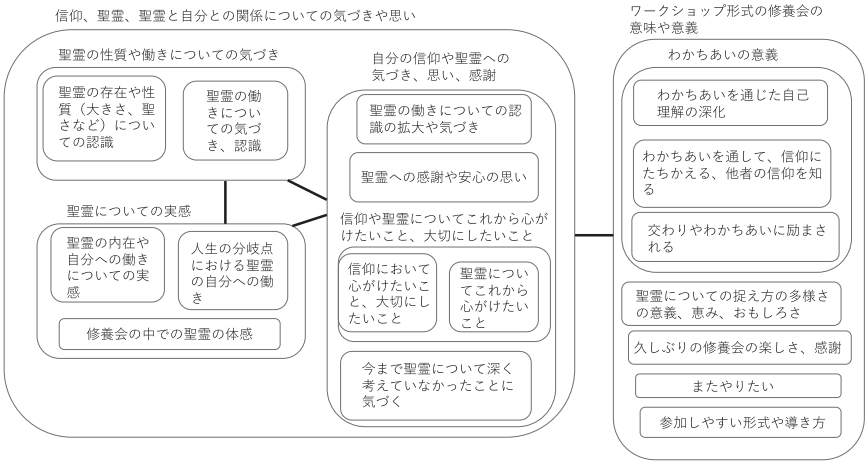

図２　アンケートの自由記述のKJ法のある分析

きた[4]。「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」はワークショップ形式による学習方法の影響を受けている。個人で考えることやそれらをグループでわかちあうことを通して、より広く、より深い気づきや学びがあったと捉えることができる。また、「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」が豊かにあったからこそ、ワークショップ形式の修養会に意味や意義を感じることができたという面もある。「聖霊の働きをリアルタイムで感じた気がする」という記述にもあるように、「私たちと共にいて下さり、働きかけて下さり、導かれている」聖霊の働きが本修養会にもあったことが本修養会の学びを深め、修養会の意義を感じることができたと捉えることもできよう。

「聖霊の性質や働きについての気づき」と「聖霊についての実感」と「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」とはお互いに関係していると考えることができた。この点については次項に記す。

(2)「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」について

「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」内に、「聖霊の性質や働きについての気づき」、「聖霊についての実感」、「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」の３つの中程度の島が見出された。「聖霊の性質や働きについての気づき」と「聖霊についての実感」と「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」とはお互いに関係していると考えることができた。「聖霊の性質や働きについての気づき」は聖霊の性質や働きについての参加者の認識であり、本修養会において再認識されたことと考えることができる。これらの性質や働きは、「聖霊についての実感」や「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」の核や基盤となることである。これらの性質や働きについて、本修養会の中で、聖霊の内在や自分への働きについて生き生きと実感したり、自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝が生起する源であると捉えることができる。また、本修養会の中で「聖霊についての実感」や聖霊の働きについて気づきや聖霊への感謝が生まれることによって、「聖霊の性質や働きについての気づき」が生きた信仰になると考えることもできる。このように「聖霊の性質や働きについての気づき」と「聖霊についての実感」と「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」とはお互いに関係しあっていると考えることができる。

「信仰、聖霊、聖霊と自分との関係についての気づきや思い」の結果報告と分析についての詳細を以下に記す。

1)「聖霊の性質や働きについての気づき」について

「聖霊の性質や働きについての気づき」は、「聖霊の存在や性質（大きさ、聖

---

[4] 図２では、お互いに関係していることを－によって結ぶことによって図示されている。

さなど）についての認識」と「聖霊の働きについての気づき、認識」の島から構成されていた。「聖霊の存在や性質（大きさ、聖さなど）についての認識」内の記述には例えば、「特に「聖霊によって祈りなさい」部分が印象的でした。「聖霊に助けられ」「聖霊に導かれ」というよりも、主体が、根本が、聖霊なのか、と受け止めました」があった。「聖霊の働きについての気づき、認識」内の記述には例えば、「イエスさまを父なる神が約束された「すくいぬし」だと信じることができるのは、聖霊の働きあってこそのものだから」があった。

「聖霊の性質や働きについての気づき」には、聖霊についての気づきに関する記述が含まれている。これらの記述は本修養会のプログラムを経験することによって、参加者が再認識したことと理解できる。本修養会のプログラムにおいて、個人で各聖句がどのような働きに当てはまるのか、どの領域に配置されるのかを考えることを通して、さらにはグループでそのことを話し合うことを通して、聖霊についての気づきが生起したと考えることができる。自分とは異なる意見を他者から聴くことによって、聖霊についてより深く考え、より広い認識が生まれることが可能になったと捉えられる。

「聖霊の存在や性質（大きさ、聖さなど）についての認識」は聖霊が神であることや大きく、聖い存在であることに関する認識が記されている。「聖霊の働きについての気づき、認識」には、聖霊の働きについての記述が含まれていた。イエス・キリストを信じ、信仰告白すること、とりなし、みたし、おしえ、みちびきなどの働きをいつも聖霊が人間に行ってくれていることを再認識したことが記されている。

2）「聖霊についての実感」について

「聖霊についての実感」は、「聖霊の内在や自分への働きについての実感」と「人生の分岐点における聖霊の自分への働き」と「修養会の中での聖霊の体感」の島から構成されていた。「聖霊の内在や自分への働きについての実感」内には例えば、「自分にはすでに聖霊が宿っており、いつも助けてくれているという意識をもつことができた」の記述があった。「人生の分岐点における聖霊の自分への働き」内には例えば、「人生の分岐点において、決断とそれを言葉で伝える時があったが、自分ではどう伝えて良いか分からない時に聖霊が働いてくださったことがあったから」があった。「修養会の中での聖霊の体感」内には例えば、「聖霊の働きをリアルタイムで感じた気がする」や「漠然ととらえていた聖霊を五感を使った印象（より身近な存在するもの）として、とらえられたこと」の記述があった。

「聖霊についての実感」には、本修養会における聖霊についての実感や体感を伴った気づきが含まれている。これらは、本修養会中に参加者が経験したいきいきとした感覚や気づきだと考えることができる。心理学的にはワークショップ形式における他者とのアクティブな関わりや身体的な動きを伴った活

動が参加者の感情や感覚を触発し、いきいきとした経験が可能になったと考えることができる。キリスト教信仰における視点からは、参加者の記述にもあるように、本修養会を聖霊が見守り、働いてくれたからこそ、このような経験や気づきが生まれたと考えることができよう。「聖霊の内在や自分への働きについての実感」は、自分にはすでに聖霊が宿っており、いつも助けてくれているということや、聖霊はすばらしい、聖い存在で、その助けに基づいて自分は存在していることを意識したことが記されている。「人生の分岐点における聖霊の自分への働き」には、人生の分岐点において決断が必要なときに、聖霊が働き、導いてくれたことや、それによって今の自分があるという経験について記されている。「修養会の中での聖霊の体感」では、本修養会中に、聖霊の働きをリアルタイムで感じたという感覚や、聖霊を五感を使った印象として、より身近な存在するものとして、とらえられたことが記されている。

3)「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」について

「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」は、「聖霊の働きについての認識の拡大や気づき」と「聖霊への感謝や安心の思い」と「信仰や聖霊についてこれから心がけたいこと、大切にしたいこと」と「今まで聖霊について深く考えていなかったことに気づく」の島から構成されていた。「聖霊の働きについての認識の拡大や気づき」内には例えば、「聖霊は主に「教える」「みちびく」ものとして理解していたつもりだが、他のはたらきも、それぞれたくさんあることを教えられた」や「聖霊に「満たされる」という状態が、他のはたらきと比べて自分ではなかなか実感できていないので、この分野が自分にはもっと必要かと感じた」の記述があった。

「聖霊への感謝や安心の思い」内の記述には例えば、「私たちと共にいて下さり、働きかけて下さり、導かれていること、又、守りの中で恵み豊かな日々を過ごすことができ、感謝です」や「むしろ、どう祈るかも分からない弱い私に祈りを与えてくださっている土台になってくださっていることに感謝」があった。

「信仰や聖霊についてこれから心がけたいこと、大切にしたいこと」は、「信仰において心がけたいこと、大切にしたいこと」の島と「聖霊についてこれから心がけたいこと」の島から構成されていた。「信仰において心がけたいこと、大切にしたいこと」内には例えば、「これからも主と共に歩む生活を送り続けたい」や「聖書をあまり読んでいないので、やはりみことばをたくわえると、より多くの恵みにふれられると思う。聖書を読むようにしたい」の記述があった。「聖霊についてこれから心がけたいこと」内には例えば、「人間は弱い部分がたくさんあると思うけれど、御霊が助けてくださることを胸に生活してみたいと思うから」や「どう祈ったらわからないときでも、御霊ご自身がとりなしてくださることを覚えたい」の記述があった。「今まで聖霊について深く考え

ていなかったことに気づく」内には例えば、「三位一体の中で自分にとって聖霊とは、どんなものかを考える機会が一番少なかったから」の記述があった。

「自分の信仰や聖霊への気づき、思い、感謝」には、本修養会のプログラムにおいて、聖霊の様々な働きについて考えたことの影響や意味に関する記述が含まれている。それらは本プログラムを経験することを通して得た、信仰や聖霊に関する参加者の学びや気づきである。「聖霊の働きについての認識の拡大や気づき」には、聖霊の働きとして、自分が理解していた以外のことがたくさんあることや自分の実感がまだ弱い面があることなどについての気づきが含まれていた。「聖霊への感謝や安心の思い」では、聖霊が共にいて、働きかけ、導かれていることや、守りの中で恵み豊かな日々を過ごすことができること、祈りを与えてくださっている土台であることなどへの感謝の思いが表れている。「信仰や聖霊についてこれから心がけたいこと、大切にしたいこと」は、今回生じた気づきを踏まえて、より広くは信仰について、また、聖霊について、自分が今後こころがけたいことが記述されている。これらの言葉には、参加者が今後聖霊をより強く意識して、より積極的・主体的に聖霊との交わりを深めていきたいとの思いが表れている。「今まで聖霊について深く考えていなかったことに気づく」は、父なる神やイエス・キリストと比べたとき、自分が聖霊について今まで深く考えてきていなかったことについての気づきが記されている。このような気づきがあり、それが「信仰や聖霊についてこれから心がけたいこと、大切にしたいこと」などの態度につながっていくことを通して、信仰の深まりが促される可能性が高まると考えることができよう。この気づきは信仰の深まりの一出発点だと考えることができる。

(3)「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」について

「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」は、「わかちあいの意義」と「聖霊についての捉え方の多様さの意義、恵み、おもしろさ」と「久しぶりの修養会の楽しさ、感謝」と「またやりたい」と「参加しやすい形式や導き方」の島から構成されていた。「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」は、ワークショップ形式やその重要な要素であるわかちあいについての記述が含まれている。ワークショップ形式の修養会に意義や楽しみを感じ、また、やりたいという参加者の思いが表されている。

「わかちあいの意義」は「わかちあいを通じた自己理解の深化」の島と「わかちあいを通して、信仰にたちかえる、他者の信仰を知る」の島と「交わりやわかちあいに励まされる」の島から構成されていた。「わかちあいを通じた自己理解の深化」内には例えば、「自分からの視点だけでなく、他人の視点を知ることで、考えが広がるのでとても良かった」の記述があった。「わかちあいを通して、信仰にたちかえる、他者の信仰を知る」内には例えば、「自分がキリスト教的なことで感じたことを、皆で分かちあうことは信仰にたちかえるた

めにも必要なことだと思った」や「共にいてくださる存在なのに、なかなか聖霊についてメンバーと話す機会もないため、みんなの感じていることや思いを知ることができた」の記述があった。「交わりやわかちあいに励まされる」内には例えば、「交わりや分かち合いにも励まされた」の記述があった。

「聖霊についての捉え方の多様さの意義、恵み、おもしろさ」内には例えば、「集中して、意識的に、また、他の兄弟姉妹との交わりのなかで、聖霊について考え、思いめぐらし、語り合うことの意義と祝福、恵みを感じました。それを初めてできたとさえかんじます」や「みことばの奥の深さや聖霊という、目に見えないものの性質、メンバーそれぞれの捉え方、知ることができたので」の記述があった。

「久しぶりの修養会の楽しさ、感謝」内には例えば、「神の家族との話し合いが久しぶりで良い時間だった」の記述があった。「またやりたい」内には例えば、「またやりたい。みんなと話す機会もないし、題材が与えられた方が、より深い話しができるので、修養会はとても良いとおもう」の記述があった。「参加しやすい形式や導き方」内には例えば、「参加しやすい形式で感謝でした。企画に感謝します。ありがとうございました」の記述があった。

「ワークショップ形式の修養会の意味や意義」は、ワークショップ形式についての言及が含まれている。ワークショップ形式におけるわかちあいの意義や意味として、わかちあいを通して自己理解が深まることや、信仰にたちかえったり、他者の信仰を知ることができることについての記述があった。また、交わりやわかちあいによって、自分が励まされる体験についての記述もあった。

また、わかちあいは、聖霊についての捉え方がメンバーによって多様であることを知る機会となり、その多様さに意義、恵み、おもしろさを感じた参加者の思いも表されている。「それを初めてできたとさえかんじます」という言葉には、この体験がこの参加者にとってとても重要で、新鮮な体験であったことを物語っている。

ワークショップ形式の修養会は今回の参加者にとって参加しやすい形式であるが、コロナ禍のため数年開催できず、今回、久しぶりの開催できたことに楽しさや感謝を感じ、また、やりたいとの思いがあったことが示されている。

Ⅳ.今後の課題

ワークショップ形式という学び方には、上述のように多種多様に利点と成果がある。ただし、弱点があるのもまた事実である。それはワークショップ形式の弱点というよりは、キリスト教会における信徒教育全般にあてはまる課題にも繋がっているとも思えるので、最後にそれを記しておく。

それは、大きく言えば「人間のコントロールを越えたところに働く大きな存在とその力に対してどこまでを任せるのか、どこまでを人間側の工夫や努力で

達成しようと試みるのか」という問である。キリスト教的な見解のある立場に立てば、人間を成長させ変化を与えるのは神ご自身であって、本質的にはそこに人智や人の力は及ばない。では、神がすべてを取り計らいその計画通りにすべてをコントロールするのなら、人は何もできない、してもしなくても結局は同じということになるのか。そのような極論・極端な予定説と呼ぶべきものも存在する。だが現実には、とりわけ聖書を中心に据えるプロテスタント教会の歴史においては、努力によって聖書を学び、神の教えを理解し実践しようという基本的姿勢が貫かれている。神の力による教会形成を信頼しつつも、人の手による「教え」「導き」の部分にも信を置くということであろう。

上記のような、成長と教育ということにまつわる本質的な問いかけの文脈に立った上で、このCRCでのワークショップに焦点を戻す。すると「どこまで成長の軌跡や成果を教育実践として追い求めるべきであり、そのための手段をどこまで踏み込んで追求すべきか」裏返せば「どこから先を神とひとりひとりの信徒のかかわりの問題として委ねるべきか」という問題に収斂するであろう。その時、人の手による教育成果を追い求める立場に重心を置くとすれば、CRCでのワークショップについては以下のような課題が浮かびあがる。

（1）「成果」についてのフォローアップ

どこまで成果があがっているのかどれだけ信徒が成長しているのかを測るすべはそもそも存在しない。個々の信徒が何を学び得たのかを知るすべは確かにアンケート等から一部知る事ができるが、ある人がどこまで変容し信徒として成長したのかは本質的に外からは窺いしれない部分がある。ある部分は「どのような実が生まれるか」＝「その人の言動における変容」によって、ある程度知ることはできる。が、決して本質的全体的理解が得られるわけではない。それでも神に完全依存ではなく、人の手による信徒教育に価値を置くのであれば、成長の評価やそれと連動して教育の手段・方向性への絶えざる検証が不可欠である。そういう意味ではワークショップによる学びも、連続性継続性を持たせた上で、信徒がどう変わったのか変わらないのか、教育手段としてのグループワーク形態に実効性があるのかないのか、そういう検証視点もこの先は必要である。それに応じて具体的な実施形態や準備形態も変わっていくべきであろう。同じテーマで再度何らかの学び会を行い、どの程度の変化があったかを実施してみる枠組みを設定するとか、実施形態そのものについての検証を踏まえて次を変えるなどの方法がある。

（2）心的状況の異なる参加者への配慮

信徒の信仰理解の深さや経験値の差が大きな中で、誰が加わっても良いワークショップを、かなり限られた時間内で行うという想定にはそもそも無理がある。誰に対しても門戸を閉ざさないという基本的姿勢自体は、教会共同体とい

うものの本質に照らして意義の深いものではある。しかし、パウロは、神との関係を咀嚼することが叶わず「乳飲み子」のように育む必要がある人々のことを記述している（コリント人への手紙 第一の3章）。つまり、信仰においては乳児から大人まで存在するということであり、同じものが食べられないのは当たり前、成長に応じたものを取り込まなければいけないということをも意味する。

例えば、時々教会の礼拝に来てはいるが、礼拝説教にて飛び飛びに聖書の箇所を数か所聞いたことがあるくらい、という参加者がワークショップに加わったとする。テーマが「祈り」であれ「聖霊」であれ、その人自身の生活実践には、それらはまずかかわってこない。ワークショップによる学びの間、その興味を持続させ、疎外感を抱かせない・少なくとも参加はできるようにする、という構造を作るのは簡単ではない。必然的にプログラムはわかりやすく、前提知識や経験が少なくてもついていけるような配慮をしたものにするか、直接的に聖書・信仰の学びを離れて、生活面での問題設定から信仰を考えていくようなタイプのものになる。

そのような場合の問題点は、いくらテーマをできるだけ絞り込んで拡散的にならないようにしたとしても、知識や経験の豊かな信徒にとっては、時間的制約と相まって「その場で自らの信仰を顧みる深い学び」に直結しにくいという点である。霊的に大人である信徒には、既に知っている神の姿や信仰のありようと、経験してきたことを再びそこで確認する場ということになるからである。もちろんそれ自体に意味はある。再度確認するという行為自体が信仰の補強になったり、新鮮な感情や意思を再度もたらしたり、という側面はもちろんあるであろう。しかし「成長」が目的であるのならば、ワークショップでの経験が、より深くより幅のある信仰形成へと向かう再出発地点となって初めて、学びは深まったということになる。その深まりや気づきへの道筋を示すところまでができてこその「教育」である。ただし、本人自身の気づきでないと結局は根底からの育ちに繋がりにくいことを思えば、誘導的になり過ぎるのは真の成長を阻むことになりかねないし、一種の権威のもとでの思考の方向付けには危険性にも留意する必要があろう。

これらを踏まえると、個々のワークショップ及びワークショップの連続的検証が不可欠であるし、それぞれのレベルで学んでもらうための仕掛けが必要になってくるであろう。例えば、より経験値の高いと考えられる信徒にはグループ内での「隠れたタスク」をあらかじめ設定し、場合によってはその意義をあらかじめ本人が意識できるようにするなど、成長過程に合わせた学び目標を多様に考えるなど、重層的にワークショップの枠を構築する等の工夫が考えられる。これらは簡単なことではないし、最初の問いかけに戻れば、どこまでを人間的な作為工夫によって誘導し、どこは個々の成長の力（と、まさしく聖霊による導き）に委ねるのかという問題は常につきまとう。プログラム構築にはよ

り試行錯誤を必要とするであろう。しかし、心的なことにかかわる問題ゆえの慎重さを保持しつつ、検証と検討はたゆまず継続することが肝要である。このような俯瞰的な視点をどのようにプログラム構築に実現させていくかを今後の課題として記しておきたい。

備考：

執筆担当箇所は以下の通りである。「Ⅰ. 問題および目的」の「１. CRCでグループワークを始めた目的」と「Ⅱ. 2022年春の修養会の実践報告」の「１. プログラムの準備・企画」の「(1) 修養会のテーマとして聖霊を取り上げたことの意味」の「１）牧師の視点から」と「２. プログラムの実施」の「(2) 榊原牧師によるメッセージ」は榊原康成が執筆した。「Ⅱ. 2022年春の修養会の実践報告」の「１. プログラムの準備・企画」の「(1) 修養会のテーマとして聖霊を取り上げたことの意味」の「２）信徒の視点から」と「Ⅳ. 今後の課題」は丹羽牧代が執筆した。「Ⅲ. 2022年春の修養会に関する考察　―アンケート結果の分析－」は楠本和彦が執筆した。他の箇所は、榊原康成と楠本和彦と丹羽牧代との共著である。

引用文献：

川喜田二郎(1967). 発想法―創造性開発のために― 中公新書.

川喜田二郎(1970). 続・発想法―KJ法の展開と応用― 中公新書.

楠本和彦・丹羽牧代(2008). 実習「閉ざされた村」人間関係研究(南山大学人間関係研究センター).7.141-154.

丹羽牧代・楠本和彦(2021). ワークショップ形式の修養会の意義と課題に関する検討　―2018年春の修養会の実践報告と検討を中心に―　人間関係研究（南山大学人間関係研究センター）. 20. 87-129.

新日本聖書刊行会 (2017). 聖書 新改訳2017. いのちのことば社.

資料１　CRC修養会一覧（丹羽・楠本、2021）

時期	長さ	テーマ・主な内容	学び方・実習のタイプ
2004年秋	1泊2日	信徒自身の中にある聖書の言葉を探求する/赦し	聖書クイズ/ケーススタディ（事例を用いたディスカッション）/価値観の明確化/牧師の講解説教
2005年秋	1泊2日	礼拝をすることの大切さ・礼拝の意味（日曜日の誘惑/無人島へ一つだけもっていくもの/礼拝の中での安息/礼拝のプログラムを一つだけ残すとしたら）/イエスと自分との距離	ロールプレイとディベート/図式化/価値観の明確化/牧師の講解説教
2006年秋	1泊2日	祈り(聖書の中での祈り、実生活の中での自分の祈り)	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/祈りの必要性についてのディベート/牧師の講解説教
2007年春	半日	日々のデヴォーション(祈り)の学び	平日と日曜日の祈りの時間の図式化とわかちあい/牧師の講解説教
2007年秋	1泊2日	葬儀について考える、祈り、人や社会との約束について考える（実習「閉ざされた村」）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2008年秋	1泊2日	人生の最期の時どうする？（最後の食事、処刑される時？）	個人への問いかけ・個人の気づきとわかちあい/牧師の講解説教
2009年春	1泊2日	聖書の出来事を知る/信徒としての喜びに気づく/聖書にある喜びの追体験	聖書すごろく/ロールプレイ/牧師の講解説教
2010年春	1泊2日	聖書の中の出会いによって起こったこと、信徒としての出会いによって起こること（イエス（または教会）との出会いの現在・過去・未来/聖書の登場人々のイエスとの出会い）	小グループやペアにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教
2010年秋	半日	自分や他者の喜びやお互いの喜びの違いに気づく	カードへの記入・カードのわかちあい、個人の気づきとペアでのわかちあい/牧師の講解説教
2011年春	1泊2日	賛美について理解を深める（賛美を聴いて、その気持ちを現す/新しい賛美(歌詞)を作る）	小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/賛美（歌詞）の創作/牧師の講解説教
2012年春	1泊2日	神を知り自分を知る（自分たちの体験を基に、神や神と人の関わりについて考える）	KJ法的ワーク、気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教

2013年春	1泊2日	神に従った聖書の人物の心を知る/なぞかけ（人物・物・オチ）/聖書の人物のなりきり演劇/自分(聖書の人物)ならどうする？	なぞがけ遊び/ロールプレイ/牧師の講解説教
2013年秋	半日	自分の性質を知る、その自分がどのように神に仕えるのか（気質分析）	質問項目に答える、各自の気質の特徴を知る、わかちあい/牧師の講解説教
2014年春	1日	自分の隠れた才能（賜物）を知る、その自分がどのように教会に仕えるのか（賜物発見）	質問項目に答える、わかちあい/牧師の講解説教
2014年秋	半日	４コマまんが/友人のために何をするか	４コマまんがの吹き出しに言葉を創作する、そのまんがを演じる/牧師の講解説教
2015年秋	半日	祈り/危機の時に何を期待し、何を祈るべきか	塩狩峠の各登場人物となって祈る内容を探る/牧師の講解説教
2016年春	半日	喜びに思いをはせる	聖書の主人公や脇役の喜びについて想像し、ストーリーを創作する/牧師の講解説教
2017年春	半日	飛び出す絵本/映像、仕掛け絵本によって自分に飛び込んでくる内容を受け止める	DVD：スーパーブックを鑑賞/牧師の講解説教
2018年春	半日	神が作ってくださっている自分の理解を深める、実習「決断の時」	個人の選択、小グループにおける気づきの自己開示とフィードバック/牧師の講解説教

資料２

2022.6.5.

2022 年度 CRC 修養会日程表

今日のテーマ：「わたしは聖霊を信じます」の聖霊は実のところ？

14:15

導入
アイスブレイク
もし聖霊を描いてみるなら

14:30

聖霊の働きについての学びとわかちあい

1　**聖句の学び**

「父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。この方は真理の御霊です」
ヨハネの福音書 14 章 16－17 節

【聖書のことばに現われる「助け手としての聖霊」】

グループごとに、
1）みことばが書かれたカードを 1 枚ずつ表向けて、そのみことばが「みちびく」「とりなす（仲介する）」「みちる」「おしえる」のどの働きを示しているか、個人で考える。
2）カードと同色の付箋を、B 紙の 4 つの領域の自分が思う場所に貼る。

5 枚のみことばについて、2）を行った後、
3）グループ内で配置が一致した場合もしなかった場合も、「なぜそこに置いたか」を聖句の言葉や状況からわかちあいつつ、最終的にはグループでどの領域にするかを決定して、みことばカードの両面テープをはがして B 紙に貼る。
全体で
4）みことばのカードをそこに置いた理由や経緯を全体でわかちあう。

2　**経験のわかちあい（証）**

【聖霊：私のガイドである助け主
―思い出したこと・もしくは今ここに思うこと】

1）3 分～5 分程度で、
「みちびかれたこと」あるいはその他の聖霊の助けを思い起こす。
もしくは学びをして気づいたことや感想など話せることを思いめぐらす。

2）グループで経験や思いをわかちあう。

15:30

聖霊なる神についてのメッセージ
「今日一番心に留まったみことば」をカードに記す。
アンケート記入

15:45

資料３

2022.6. 5 .

2022 年度 CRC 修養会アンケート

１．あなたが持ち帰ろうと選んだみことばは、どのみことばでしたか？そのみことばを選んだ理由や気持ちを記してください。

みことば：

理由や気持ち：

２．この修養会は、あなたにとって、どれくらい意味がありましたか？

（どのような点で）　　１---２---３---４---５---６---７

全くなかった　　大変あった

３．修養会で考えたこと、気づいたこと、学んだことを記してください。

1）聖霊について

2）自分について

４．その他、自由に…（スペースが足らない場合、裏面に記してください）

自分の記録のために、このアンケートを提出前に撮影することをお勧めします。

本アンケートの記載内容について匿名性に配慮して論文に使用することをご了解ください。以下の論文と類似の論文を構想しています。丹羽牧代・楠本和彦（2021）．ワークショップ形式の修養会の意義と課題に関する検討　―2018 年春の修養会の実践報告と検討を中心に― 人間関係研究（南山大学人間関係研究センター） 20　pp.87-129.